

# より道、はずれ道の 成長論

NPO法人コスモス村 代表 山下英三郎

## ウランバートルの街角で

子育てについて考える時に、いつもある場面を思い浮かべる。それはモンゴルのウランバートルの雑踏で遭遇した母と2歳くらいの子どもの姿だ。どんな顔をした母親か、子どもが男の子だったか女の子だったかも憶えてはいない。その母が、何か特別なことをしていたわけでもない。日々の営みの断片が路上で繰り返されていただけの光景なのだが、僕の脳裏に妙に強く焼きつけられている。

僕は1990年代の末から20年以上モンゴルに通った。同国では1991年の社会主義体制崩壊後の社会的混乱の結果、90年代半ばから街頭に飛び出す子どもたちが増え、真冬にはマイナス30℃を下回る厳寒を避けるため、街中に張りめぐらされている暖房用のスチームパイプを点検するマンホールに住み着くようになった。そのような子どもたちが、30

00人から4000人にまで及ぶといわれ、彼らに対する支援が行き届いていないという状況を知り、僕にも何かできることがあるばという思いから、年に2〜3回仲間や学生たちと訪ねるようになった。

ストリートで保護された子どもたちが入所する児童養護施設や、その他いくつかの施設を訪ね交流することを常としていたが、滞在中には自然の景観を愉しむ時間やショッピングをする時間なども確保していた。活動を継続するには、リラクセスして過ごす自由時間や街の様子を知ることが大切だと考えていたからだ。女性たちは総じてショッピングが好きなので、街中にあるカシミアショップやお土産を売っている店に入るのが常だった。そうになると、僕などは手持ち無沙汰になるため、表通りの道路脇に座り込んで行き交う人々を眺めていることが多かった。

で、先ほどの母子だが、同行者たちがお店でショッピングをしている間に、道ばたに腰を下ろしていつものように通り過ぎる人たちを眺めていた時に遭遇したのだった。ヨチヨチ歩きの子どもが、広い舗道をひとり右に左に寄り道をしながら僕の方へ近づいてきた。こんなに小さな子がひとりで歩いて大丈夫なのかと思っていたら、その子の2〜3メートル後ろに、ずっと一定の距離を保ちながら若い母親が歩いていた。彼女は、子どもを制することなく、その子の思うがままに動かせていた。僕の方に近づいてきた時に、その子の可愛さに惹かれて少し構ったのだが、その間も母親は僕を警戒するでもなく、やはり一定の距離を保ちながら見守ってい